

車との別れ

車を買換えた。古い車は十二年間も乗っていたものだ。新車がやって来る前日、妻と私は乗り馴れた車を洗車場に運び、普段よりずっと丁寧に洗ってやった。どうせ廃車になるのだし、汚れたままでもどうって事はないのだろうが、この車には夫婦の情が移ってしまい、家族の一人と別れるような気分になってしまっていた。だから、せめて身綺麗な姿で引き取ってもらいたかったのだ。

車の名義は私ではない。車は妻のものだ。

私は免許を持っていない。車に乗る時、妻が運転席で私は助手席である。十二年前、ふと思いついたように妻が免許を取ると云い出して学校に通った。運動神経が良好とは思えない妻だが、案外簡単に免許が取れた。その時に買った車である。

初めて妻の運転する車に乗った時、最初に思ったのは“国家試験とはこんなにいゝ加減なものか”という事だった。“こんな程度で合格させるのか”と。車は実に従順な生き物(?)である。運転者の技術のとおり、エンストも起こせば車庫にぶつかりもする。それにもめげず、札幌から稚内へ、そしてオホーツク沿いに網走、釧路から日勝峠ごえで帰札などという快挙もあって、妻は次第に腕を上げていった。

世間様の例にならって買換えようかという話も何度かした。販売店からの誘いもあった。次の車検まで乗ろうとか、別に悪い所があるわけじゃなしとか、いつも買換え話は立ち消えになった。

そのうち、妙な音がするようになったり、表面に錆が浮いてきたりしました。不思議なことに、車にボロが目立ってから、却ってなじんだこいつが可愛くなってきた。我が身の老いと車の老いが重なる思いでもあった。

十万キロ。良く事故もなく走ってくれた。洗車が終わって、内部を片付けて、傷やら錆やらを一度眺めて、「ご苦労さん」と何となくつぶやいた。その夜の晩酌はもっぱら車での旅の話だった。